

「アユ(4)」 仔魚の生息場所を解明

表層—なぎさに出現

海に下ったアユの仔魚(しぎよ=ふ化直後から稚魚になるまで)は、体長約2cmになると砂浜の波打ち際に現れることが1980年代にやっと明らかになった。それ以降、「なぎさに出現する前のアユ仔魚はどこにすんでいるのか？」が、研究者の間で謎とされ、海底付近ではないかという説が有力であった。

ところが、水産試験場の調査船「はやつき」による7年間にわたる富山湾での調査によって、アユの仔魚の大部分は水深1mより浅い塩分躍層(えんぶんやくそう=塩分が急激に変化するところ)の表層側(淡水の影響を強く受けるところ)に生息し、表層からなぎさに出現することが世界で初めて(もっともアユは日本周辺にしかいないが)明らかになった。

晩秋から冬。能登半島が西側に位置するとはいえ、日本海に面する富山湾はしけの日が多い。また、沿岸近くには大小の定置網が網の目のように敷設されている。富山湾でのアユの仔魚の調査はそれこそ手探り状態で始まった。

調査船で岸近く、または沖合いの表層で網を引く。岸近くの表層では仔魚がとれる。では、中層や底層はどうなのだろうか？果てしない試行錯誤が続いた。

天候の急変や視界不良による調査途中の引き返しは頻繁に起こり、河口近くへ寄りすぎたため砂地へ乗り上げそうになったこともあった。未知の生態の解明には、大変な労力を要したのである。

アユはサケ・マスのような母川回帰性が無いとされ、産卵する親魚の保護など、河川で海産アユを増やす増殖努力を行っていても、果たして本当に自分の川への見返りがあるのか、という疑心暗鬼が常につきまとっていた。

しかし、富山湾での調査により、アユの仔魚の沖合い方向の生息域も、海岸から約3km以内の河川水の影響を強く受ける範囲に限られることも明らかになった。アユ仔魚は母なる川の水を覚えているかもしれないという可能性(期待)がいきなり高まったのである。(田子泰彦)



調査船「はやつき」を使って行われた富山湾でアユの仔魚の生息調査。
船体の右側にあるのが仔魚を採集するネット＝平成7年11月